

## 巻 頭 言

### 協働に向かう「ちから」となるもの

看護福祉学部は、平成5年に開設されましたが、早いもので、この春で18年目を迎えます。この年月の重みは、昨年の看護福祉学部学会学術大会に確実に現れていたと思います。記憶をたどれば、平成16年の第1回学術大会では、研究発表の多くが教員によるものだったように思いますが、昨年の第6回大会では、学部の卒業生や大学院の修了生がその多くを占めていました。まさに、卒業生や教員の学問的な研鑽と交流をめざすという本学会の理念が体現されつつあると言えるのではないのでしょうか。

第6回学術大会では、看護と福祉における「協働」のあり方と課題について検討したいと考え、「緩和ケアとしての接点―看護のちから、福祉のちから」をテーマに企画・運営しました。講演会では、在宅緩和ケア支援センターの実践をうかがい、分業と対比して協働に対する考えを深めることができました。また、シンポジウムでは、学部卒業生と大学院生を含む3名の方に、看護と福祉の立場からそれぞれご発言いただき、両者の協働における課題が見えてきました。

「協働 collaboration」とは、言を俟たず、協力して働くことを意味します。しかし、シンポジウムから見えた課題から察するに、存外、「言うは易く行うは難し」といった感があります。これを実践するには、協働に何が求められるのか吟味する必要があるようです。まず、看護と福祉に携わる者が、何のためにどこに向かって協力し合うのかを見据え、その方向性をケアの受け手の変化として摺り合わせることが何より重要でしょう。それと同時に、それぞれが、自らの専門性を自覚し、それを具現化することはもとより、協働する相手に言語で伝えることが必須と言えます。そうは言っても、活動する領域が近いがために、見えそうでいて捉えきれない場合があるのも確かです。このように考えると、本学会での発表や交流が、自らの専門性を伝え、相手のそれを理解するための場となり、それこそが、看護と福祉が協働に向かうための「ちから」になるものと思うのです。

思えば、看護福祉学部の設立当初から、私たちには、「看護と福祉の統合」についてどのように考えるのが問われ続けてきたように思います。今改めて思うことは、取り組むべき課題は、学問的な「統合」より、まずは現場での「協働」をいかに実践するかではないかということです。看護と福祉に携わる者が、それぞれの専門性を発揮し、ときには楔形に、またあるときは重なり合うように協働するために、互いに研鑽を積み続けていきたいものと願っています。

2010年2月27日

北海道医療大学看護福祉学部学会  
第6回学術大会長 平 典子